

2 ひとり親世帯と子どもの進学期待・学習状況

首都大学東京人文科学研究科教授 稲葉昭英

1 はじめに

ひとり親家庭の出身者が、二人親家庭出身者に比して教育達成上大きな格差を経験していることが知られている。先行研究※によれば、こうした格差は特に大学進学について大きく、戦後まったく格差の縮小傾向が示されないこと、ひとり親家庭出身者の女性にいたっては戦後一貫して大学進学率が上昇しておらず、近年ほど格差が拡大していることが指摘されている。

ここでは、こうした格差の状況を子ども（中学3年生）の教育アスピレーション（進路についての考え）を中心に検討する。

※ 稲葉昭英,2011「ひとり親家庭出身者の教育達成」佐藤嘉倫・尾島史章編『現代の階層社会[1]格差と多様性』東京大学出版会,239-252頁.

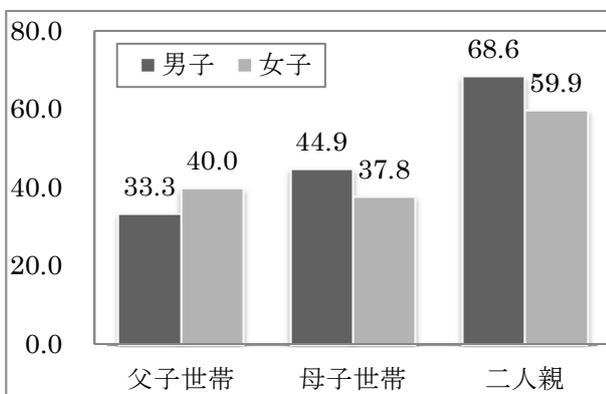
2 家族構造の状況

ひとり親、二人親、など自分の出身家族の構成は家族構造とよばれる。ここでは、家族構造を父子世帯(n=55)、母子世帯(n=368)、二人親世帯(n=2700)の3者に区分した。祖父母との同別居状況は、父子世帯で34.5%、母子世帯は18.5%、二人親世帯は15.1%と父子世帯は同居率が高い。ただし、全体的には祖父母と同居していない世帯の方が圧倒的に多いことを確認しておきたい。

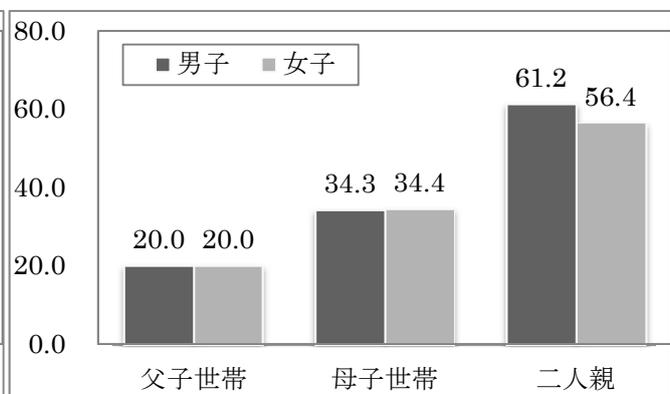
3 家族構造と教育アスピレーション

3.1 理想の進路

家族構造別・子どもの性別にみた「理想の進路」から分析する。男女ともに二人親とひとり親では大きな格差が示され、一貫してひとり親世帯に4年制大学以上への進学希望が低い(図IV-2-1)。男子では父子世帯でもっとも進学希望が低いのに対して、女子では母子世帯のほうが低いという特徴がある。最も進学希望が低いのは父子世帯の男子で、4年制大学進学希望は33.3%であった。



図IV-2-1 子どもの性別・家族構造別にみた「理想の進路」(4年制大学以上を希望する%)



図IV-2-2 子どもの性別・家族構造別にみた「現実的な進路」(4年制大学以上を希望する%)

3.2 現実的な進路

続いて、現実的な進路（「現実的にはどの学校まで行くことになる」かを尋ねたもの）について同様に4年制大学以上への進学希望に関する集計を行った（図IV-2-2）。「理想の進路」に比較して、男女の差異はほとんどなくなるが、理想の進路で示された家族構造間の差異はより顕著になる。理想の進路とのズレは特に父子世帯で女子 20%ポイント、男子 13%ポイント強と大きい。理想の進路でも格差は大きい、その実現可能性でもひとり親世帯への所属は不利な状況にあり、特に父子世帯にその傾向が大きいといえそうだ。

3.3 現実的な進路をもたらすもの

現実的な進路のような結果が生じる理由は、性別・家族構造にかかわらず、「それが自分の希望だから」とするものが半数以上を占めており、最も多かった。ついで「普通その学校まで行くと思うから」が高く、男子では25%近く、女子では23%ほどがそのように回答していた（表IV-2-1）。

表IV-2-1 現実的な進路となる理由（複数回答）

		N	自分の希望	普通の学校 まで行く	自分の 学力	親の希望	親が必要な いと考える	経済的余裕 なし
男子	父子	30	50.0	23.3	23.3	13.3	6.7	6.7
	母子	168	53.6	20.2	29.2	10.7	0	11.9
	二人親	1430	61.5	25.0	22.6	12.7	0.1	2.5
女子	父子	25	60.0	16.0	32.0	4.0	4.0	8.0
	母子	196	65.8	20.9	15.3	9.2	0.5	15.3
	二人親	1256	69.7	23.4	16.3	10.1	0.5	3.2

注：数字は当該セルの集団において各項目に「あてはまる」としたものの%を示す。

なお、4年制大学に進学を希望しないケースのみを抽出して性別・家族構造別に理由を検討したが、男子ではほぼ46%が、女子では55~60%が「自分の希望」で最も多く、経済的理由は母子世帯の男子で16.5%、女子で22.2%がやや高いが、それ以外は顕著なものではなかった。経済的理由よりも子どもの選好が家族構造による差異を生み出しているということになる。

さらに理想の進路よりも現実的な進路が学歴上低いケースのみを抽出し、性別・家族構造別に理由を調べた。男子の父子世帯では「自分の学力から考えて」が60%、ついで経済的理由が40%であった。「学力」は男子の母子世帯でも67%、二人親では73%に達した。このように、男子で「理想よりも現実が下回る」と判断される根拠は、基本的には学力であり、経済的理由はそれに比較して小さかった。

一方で女子の父子世帯では「学力」40%と、学力の比重は男子よりも少ない。女子の母子世帯では経済的理由が64%にも達し、「学力」は46%であった。男子は経済的理由よりも学力が理想と現実のズレを生み出していたが、女子は学力以外の理由の規定力が大きく、特に母子世帯では経済的理由が圧倒的であった。女子のほうが家庭の状態を認識して自分のライフコースを変更していることが示唆される。

4 子どもの学習状況・学習意欲

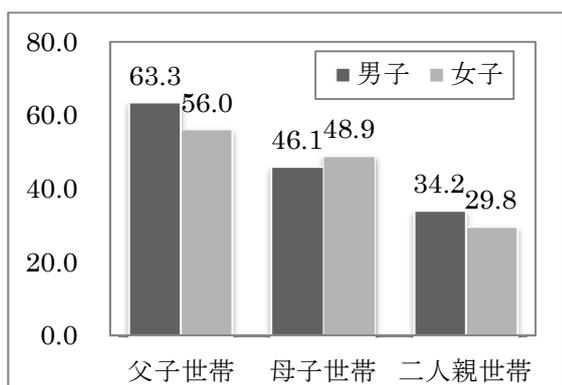
4.1 学習状況

さらに学校の成績や、日ごろの学習状況との関連を検討した。まず、成績は男女ともに二人親世帯で上位の者の比率が高くなり、父子世帯に下位の者の比率が高くなる。図IV-2-3は、成績が「下の方」「や

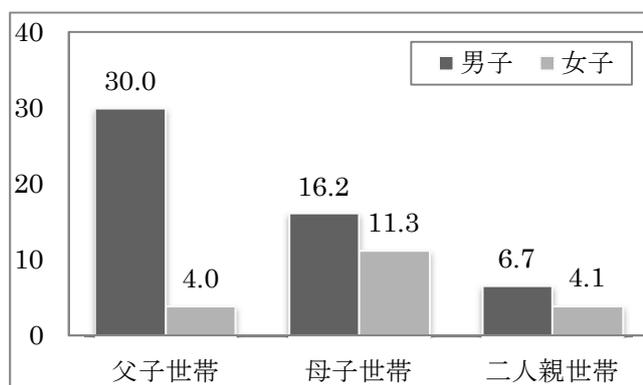
や下の方」を合計した集計結果である。家族構造による差異は男子のほうが大きく、父子世帯では「成績が下の方」だけで53.3%に達している。男女ともに母子世帯は父子世帯と二人親世帯の間である。

平日の学習時間について、「まったくしない」者の百分率を求めたのが図IV-2-4である。男子では父子世帯で30%と高く、母子世帯の16.2%でこれに次ぐが、二人親家庭ではこの数値はわずか6.7%にとどまる。女子では家族構造間の差異は小さく、母子世帯でこの数値がやや高いが、父子世帯と二人親世帯の差はほとんどみられない。休日の勉強時間についての全体としての傾向は平日と似ている。

学校の授業の理解度（「学校の授業をどのくらい理解していますか」）は男女ともに二人親世帯に「理解している」「だいたい理解している」が多くなるが、男子では父子世帯で「あまり理解していない」「理解していない」の合計が33.4%、母子世帯で31.6%とそれほど差が示されないのに対して、女子では父子世帯で48%、母子世帯で24.0%と大きな差が示される。

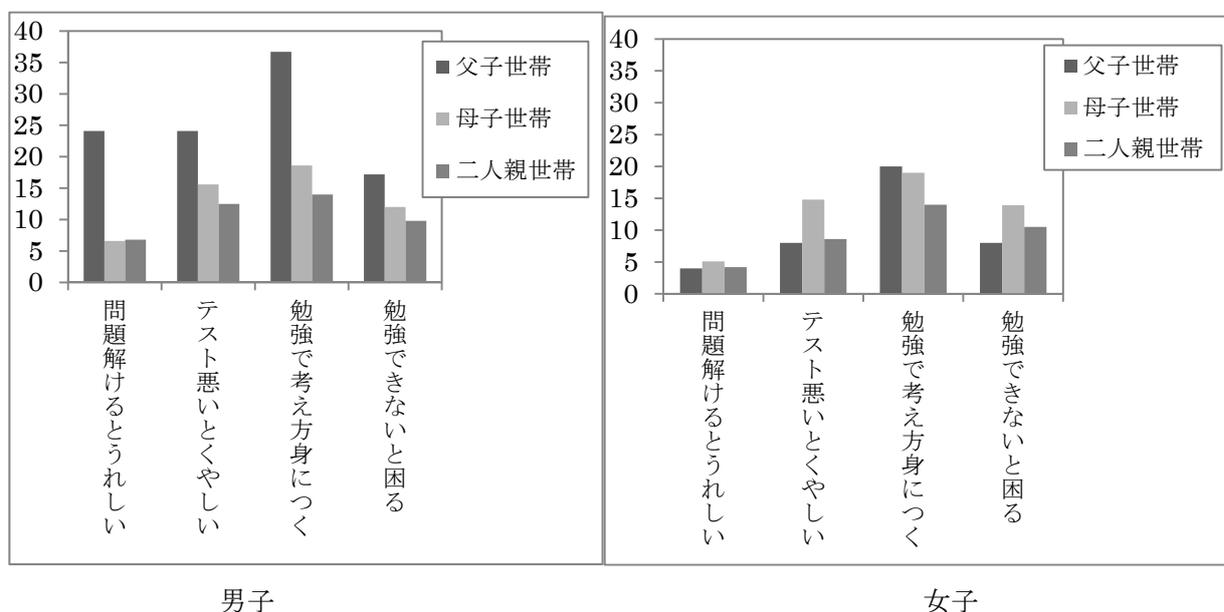


図IV-2-3 「成績が下の方・やや下の方」の者 (%)



図IV-2-4 平日勉強時間「まったくなし」の者 (%)

4.2 学習意欲



図IV-2-5 学習意欲項目の否定傾向 (「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」の合計, %)

学習意欲については、「問題が解けたり、新しいことを知ったりすることはうれしい」「テストでよい点がとれないとくやしい」「勉強することでいろいろな考え方を身につけることができる」「勉強ができ

ないと将来就職に困る」の4つの意見に対する賛否を4件法で尋ねている。各項目について、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の回答を合併し、否定傾向を比較した（図IV-2-5）。

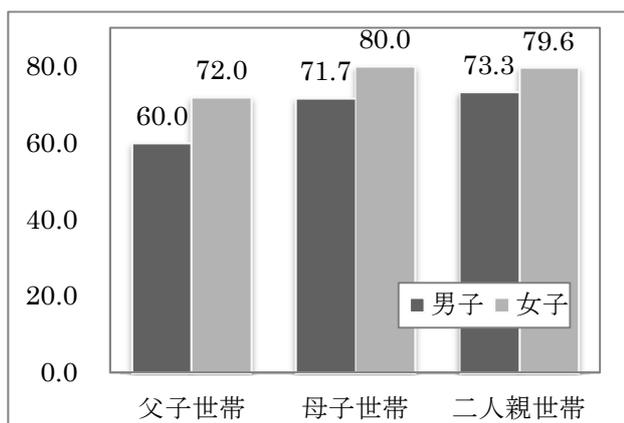
男子の結果は、父子世帯とそれ以外の2世帯の差異が大きい。父子世帯の男子は「勉強ができないと将来就職に困る」を除く3項目では否定傾向が強く、とりわけ「勉強することでいろいろな考え方を身につけることができる」という意見には37%近くがこれを否定している。勉強できないと就職に不利になると感じている一方で、勉強それ自体の価値や意味づけが希薄であることがわかる。これに対して女子の場合は全般的に家族構造による差異は小さいが、母子世帯でやや否定傾向が強い。

学習状況・学習意欲は男子では父子世帯に低調な傾向があり、ついで母子世帯、二人親世帯の順となる。女子では家族構造間の差異は大きくはないが、総じてひとり親世帯に低調な傾向が観察された。

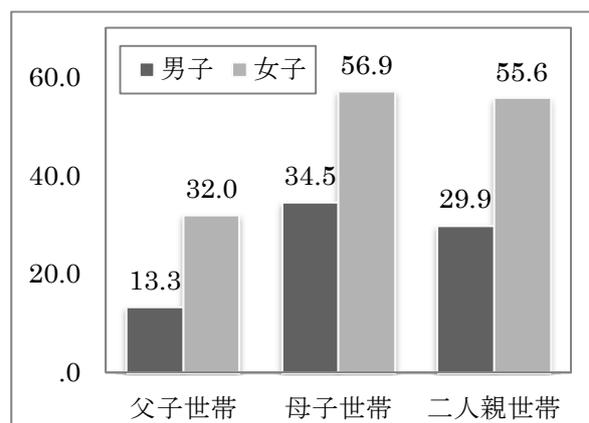
5 親との関係

5.1 親との関係と相互作用

保護者調査票の回答者（父または母）には、「あなたとお子さんとの関係はいかがですか」という質問（回答は「良い」から「悪い」までの5件法）によって子どもとの関係の良好度が測定されている。性別家族構造別にみると、男子の中では父子世帯に「良い」が少なく（33%）、また女子の中でも同様である（同44%）。「良い」「どちらかといえば良い」を合わせた群を良好群と考え、子どもの性別・家族構造別にその百分率を示したのが図IV-2-6である。



図IV-2-6 子どもとの関係が「良い」「どちらかといえば良い」者 (%)



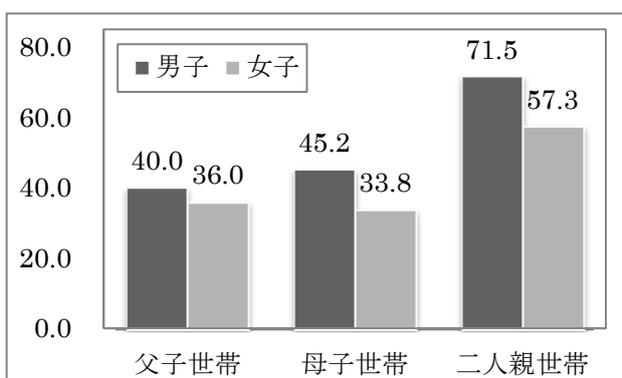
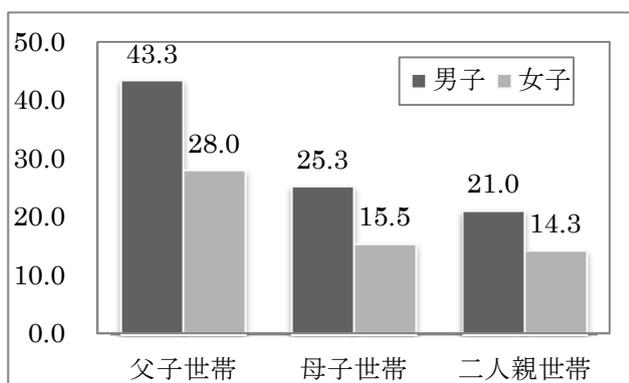
図IV-2-7 学校のことなどを家で「よく話す」者 (%)

概して女子のほうが親との関係が良好であり、また母子世帯と二人親世帯の差異が比較的少ないのに対して、父子世帯はやや異質である。先行研究では母親と子の関係は概して良好だが、父親と子の関係はそれよりは悪いことが知られている。このことから考えると、父子世帯の結果は父子世帯固有の特徴というよりも、父親と子の関係にみられる一般的な傾向が回答されている結果であるとも考えられる。

ついで「学校や友達のことを家でよく話す」程度を性別家族構造別に集計したのが図IV-2-7である。全般的に女子の方が親とよく話をしており、もっともよく話をするのは母子世帯の女子、ついで二人親の女子であった。男子は女子よりも親との会話頻度は少ないが、母子世帯の親との会話頻度をもっとも高い。母子世帯と二人親世帯の差は男女ともわずかであった。二人親の回答者の多くが母親であることを考えると、基本的に母子間の会話頻度が高く、父子間の会話頻度が低いものと考えられる。父子世帯

は全般的に会話頻度が少ないが、特に男子で極端に会話頻度が少ない。

子どもとの相互作用時間（「平日にお子さんと一緒に何かをしたり、相手をしている時間」）を同様に検討し、30分未満の者の占める百分率を示したのが図IV-2-8である。全般的に男子に相互作用時間は短い者が多く、また男女ともに父子世帯で相互作用時間が短い。母子世帯と二人親世帯には差異はほとんど見られない。もっとも相互作用時間が長いのは母子世帯であり、特に女子では2時間以上が45%近くにまで達する。各カテゴリーの中央値を用いて平均値を算出すると男子は父子世帯 58.3 分、母子世帯 93.5 分、二人親世帯 90.7 分、女子は父子世帯 75.3 分、母子世帯 121.8 分、二人親世帯 107.0 分となる。以上の差異はこれまでと同様に、父親との相互作用が少なく、母親との相互作用が多い結果であると考えられる。男子よりは女子に相互作用は多く、親子ともにジェンダーによる差異が強く看取できる。この組み合わせを考えれば、父子世帯の男子が総じて親とのコミュニケーション機会に恵まれていないこと、二人親世帯と母子世帯ではそれほどコミュニケーション機会に差異が生じないこともわかる。



図IV-2-8 1日の親子の会話時間 30分未満の者 (%) 図IV-2-9 4年制大学への進学を期待する親 (%)

5.2 親の進学期待

親たちの子どもの進学についての期待は「あなたはお子さんに、理想的にはどの段階の学校まで進んでほしいと思いますか」という指示によって回答を求めている。4年制大学以上への進学希望の百分率を子どもの性別・家族構造別に求めたものが図IV-2-9である。まず子どもの性別による差異があり、男子のほうが高い学歴を期待されているが、それ以上に家族構造による差異のほうが大きい。男子では二人親世帯の7割以上が大学進学を希望しているのに対して、父子世帯は40%、母子世帯では45%強が希望しているにすぎない。父子世帯では高校が40%のほか、「特に理想はない」13%、母子世帯では高校が30%、専門学校13%、「特に理想はない」8.4%と、専門学校の比率がやや高い。

女子では二人親世帯の57.3%が4年制大学以上への進学を希望しているのに対して、父子世帯では36%、母子世帯では34%と低い数値を示す。父子世帯では高校48%、専門学校12%、母子世帯では高校26%、専門学校17%となる。男女ともに母子世帯の方が父子世帯よりも専門学校の希望が高い。

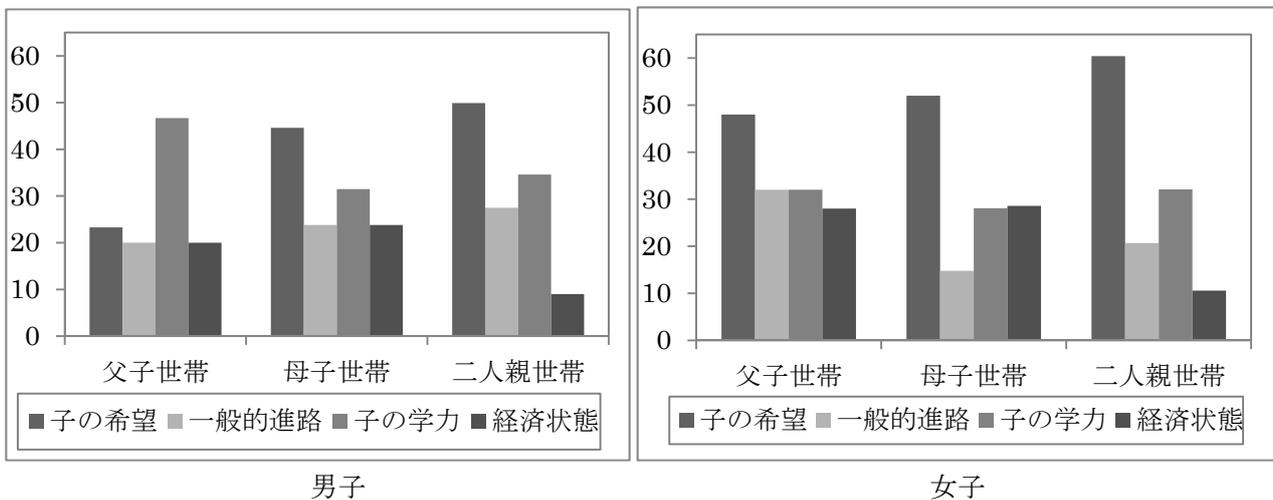
以上の傾向は、親から見た子の「現実的な進路」についての結果でも大きくは変わらない。男子の場合、4年制大学以上に進むとする回答は父子世帯では20%、母子世帯では32.2%に対して二人親世帯は60.2%である。女子では父子世帯28.0%、母子世帯29.7%、二人親世帯48.8%と、男女ともにひとり親世帯と二人親世帯の差が大きい。ただし、理想と現実の差は男子に大きく、女子では10%ポイントと小さい。これは女子の方が親とのコミュニケーション機会が多い結果なのかもしれない。

次に親がこのように進路を考える理由について、複数回答によって回答を求めた結果を図IV-2-10に

まとめた。理由としては「子どもがそう希望しているから」「一般的な進路だと思うから」「子どもの学力から考えて」「家庭に経済的な余裕がないから」の4つの結果について取りあげた。

女子では家族構造に関係なく「子の希望」が一貫して最頻値を示し、主要な理由となっている。男子は父子世帯で「子の学力」が47%近くと他と異なったパターンが示されているが、それ以外では「子の希望」が最も多く、ついで「子の学力」、「一般的な進路だと思ふ」「経済状態」の順であり、子どもの回答と傾向は同様である。女子は男子より「経済状態」とする回答が多く、父子世帯、母子世帯ではそれぞれ28.0%、28.6%と高い数値を示している。

以上の結果が信頼に足るものであれば、予定の進路は子どもの希望に大きく規定され、ついで学力に規定される。総じて経済的問題よりも、子ども自身の希望と学力によって進路が考えられていることになる。とすれば、子どもの選好がどのように形成されるかが決定的に重要であるといえる。特に女子は、親との豊富なコミュニケーションを通じて、早い段階で親の意向を内面化したり、あるいは親の負担を予想して進路を考えている可能性もある。



図IV-2-10 現実的な進路のようになる根拠（複数回答、数値はその理由を選択した者の%）

5.3 しつけの価値・教育的価値

しつけ・教育の価値については親に対して「お子さんの教育にあたってどのようなことを重視されていますか」という教示のもと、「正直であること」「自制心があること」「両親の言うことに従うこと」「ものごとがどのようにして起こるかについて興味をもつこと」「身だしなみがよく清潔にすること」「目標をたてて努力すること」「他人を思いやること」「協調性のあること」「自分の意見をはっきり伝えること」「自立して考えること」の10項目が配置され、それぞれ重視する程度が4件法で測定されている。

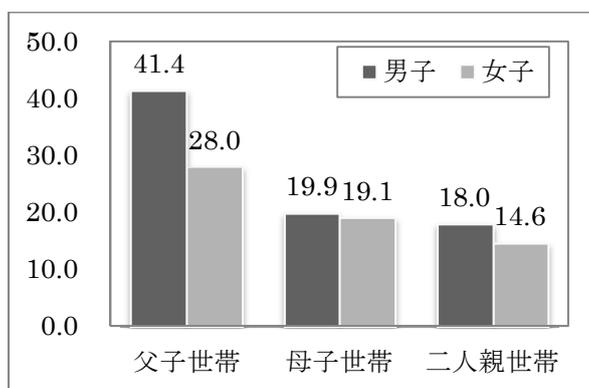
分析の結果、唯一「身だしなみがよく清潔にすること」について、子どもの性別と家族構造の有意な主効果が示された。女子の方が重視されており、父子世帯ではあまり重視されていなかった。母親ほど重視し、女子ほど重視されるというジェンダー化された結果といえる。しかし、他の9項目は有意な効果を示さなかった。しつけや教育についての考え方は、性別や家族構造による差異は概して少ない。

6 将来への希望

子どもたちは将来についてどのように感じているのだろうか。「あなたは自分の将来について明るい希望を持っていますか」という問いに対する回答（「希望がある」から「希望がない」までの4件法）

について、「どちらかといえば希望がない」「希望がない」を合計した集計結果を図IV-2-11に示す。

父子世帯とそれ以外の差が大きいですが、母子世帯と二人親世帯の差異は少なく、男女差もわずかでしかない。父子世帯の男子に悲観的な傾向が強い。なお、「現在悩んだり困っていること」について尋ねた結果では、父子世帯の男子で「進学のこと」が多く（76.7%）、「就職のこと」「学校のこと」なども高かった。自分の希望するような進路の選択が難しい状況にあることが、こうした心理状態を引き起こしているのかもしれない。



図IV-2-11 自分の将来に明るい希望が「どちらかといえはない」「ない」者 (%)

7 所得の効果か家族構造の効果か

子どもの性別と家族構造によって学習態度や親子の関係に多くの差異が示された。根本的な問題は、どこまでが家族構造固有の効果であり、どこまでが他の要因で説明される効果か、ということである。ここでは世帯の経済状態及び親の学歴を統制することで、この問題に答えたい。

従属変数は子どもの成績（5段階、高得点ほど上位）及び理想の進路・現実的な進路（4年制大学以上を1、それ以外を0とするダミー変数）の3変数とし、成績は重回帰（OLS）、理想の進路・現実的な進路はロジスティック回帰を用いて効果の推定を行う。独立変数には等価世帯所得（単位は万円）、父母の学歴（それぞれ大卒か否かのダミー変数）、家族構造（父子世帯、母子世帯をそれぞれダミー変数とし、二人親世帯をレファレンスグループとする）の各変数を設定した。分析は性別に分けて行った。

表IV-2-2から明らかのように、母子世帯の効果は男子・女子ともに消失している。この効果は、もっぱら等価世帯所得の効果によって生じていた。成績や進路にみられる母子世帯の効果は、所得の効果で説明される。母子世帯であるがゆえに二人親世帯と差が生じるのではなく、母子世帯が貧困であるために、差が生じるということになる。ここから、こうした格差の解消には母子世帯への所得保障が重要な意味を持つことがわかる。母子世帯と二人親世帯の家族関係に差異は少なかったにも関わらず、教育アスピレーションに大きな差が示されたことは、経済的な要因が主因であると考えれば理解可能である。

一方、父子世帯の効果はほとんどの場合に維持されている。女子の理想の進路についてのみ、有意な効果は消失しており、このことは興味深いですが、現実的な進路及び成績は所得や親の学歴を統制した上でもなお父子世帯の効果は解消されない。このことは、所得保障を充実させたとしても、この格差は簡単には解消されないことを示唆している。すでに見てきたように、父子世帯は親子関係などに二人親世帯との大きな差異が示されており、こうした家族内の相互作用や関係上の差異が所得とは独立に成績や教育アスピレーションの差異を生み出している可能性がある。

表IV-2-2 等価世帯所得を統制した家族構造の効果

独立変数	従属変数					
	成績		理想進路大学(=1)		現実進路大学(=1)	
	(β)		exp(β)		exp(β)	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
定数	2.36***	2.46***	.365***	.342***	.257***	.251***
等価世帯所得	.001***	.001***	1.00***	1.00***	1.00***	1.00***
父大卒 (=1)	.296***	.256**	2.85***	2.46***	2.83***	2.28***
母大卒 (=1)	.231**	.241**	1.64**	1.57**	1.50**	1.41*
父子世帯(=1)	-.581*	-.561*	.289*	.835	.251*	.272*
母子世帯(=1)	-.035	-.151	.865	.873	.662	.974
R ² (Nagelkerk R ²)	.070***	.074***	(.227***)	(.167***)	(.243***)	(.183***)
N	1240	1171	1256	1187	1254	1179

注：成績は重回帰、進路はロジスティック回帰。*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

8 要約と結論

本節では、子どもの教育アスピレーションや成績、勉強時間、学習意欲、親子の相互作用などについて家族構造による差異を検討した。性別にかかわらず、ひとり親世帯は二人親世帯よりも成績が下位の者が多く、理想の進路・現実的な進路いずれにおいても、大学進学をあげるものは少なかった。これらはとりわけ父子世帯で低い数値を示した。

しかし、成績や教育アスピレーションに見られる母子世帯と二人親世帯の差異は、そのほとんどが所得の差異、換言すれば貧困から説明された。一方、父子世帯については、その差異を所得や親の学歴から説明することはできなかった。このように、母子世帯と父子世帯には質的な相違が存在するようだ。

ひとり親でも二人親でも、母親と子の相互作用は多く、父親と子の相互作用は少ない。親子の関係は父親よりも母親のほうが、男子よりは女子のほうが良好である。勉強への意欲や勉強時間は、これらと連動するかのようになり、父子世帯の男子で低い・少ない傾向が目立ち、また将来への希望などにも悲観的な傾向が示された。所得や親の学歴によって説明され得ない父子世帯の独自の効果は、こうした家族関係上の要因によって説明される可能性がある。

女子の中では家族構造による差異はわずかであり、家族内の相互作用や関係の良好度については母子世帯と二人親世帯の間に差異は示されなかった。女子については家族構造間で示された成績や教育アスピレーションの差異を親子の相互作用時間や関係の質によって説明することは難しいと考えられ、実際に多くの差異が所得によって説明された。にもかかわらず、「4年制大学に進学しない」根拠として挙げられていた理由の多くは経済的要因ではなく、自らの選好であった。ここから世帯の所得の低さを早い段階から女子自身が認識し、それにあわせて選好が形成されている可能性が推察できる。

では、家族構造による差異を弱める要因はないのだろうか。成績は勉強時間との関連が大きいですが、同じ勉強時間でも家族構造による成績の差異は示されていた。父子世帯の男子は、「悩んでいるときに父が相談に乗ってくれる」場合に成績が改善されていたが、女子にはこの効果は示されなかった。男子は塾や習い事をしている場合に、家族構造による差異が縮小していたが、女子にはこの効果は示されなかった。このように、男子は環境的な要因によって家族構造の影響力が変化する傾向が示されたが、女子には頑健な家族構造の効果が示された。ひとり親世帯の女子は早くから親を補佐する役割を担い、家族の経済状態を認識し、自らのライフコースを想定していると考えればこの結果は理解可能である。

このように考えると、家族構造の影響力が出現する時期を明らかにすること、家庭内での子どもの役割や行動のパターンと選好形成との関連を明らかにしていくことが必要であると思われる。